

2009 年夏学期 月曜日二時限目 北川東子先生

比較思想 試験プリント

1、試験内容

まず、なによりも重要な試験内容を先に確認しよう

【存在論(現存在分析)についてのまとめを書く】

ハイデッガーの人生にそって全体的なまとめを書いてもかまわないそうだが、「現存在分析」についての内容を書いたほうが点数はもらえるようであり、そちらを求めているそうだから、そっちを書こう

【「安全」または「歴史」について】

授業でやった「安全」、または授業で多少触れた「歴史」について書く

もちろん、ハイデッガーの考えを用いながら書くべきだろう

ちなみに、「安全」のほうが書きやすいと僕は思います

以上二つの試験問題であるが、北川東子(トウコじゃなくてサキコ)先生は「聖母」であるから、まずは一生懸命書くことが大事だと思います。

「量で攻める」のではなくて、質が重要であるのは確かだけど、一生懸命書こう！

今回のシケプリでは、試験内容に沿ってハイデッガーの思想をまとめていく

重要な参考文献としては

・北川東子『ハイデガー 存在の謎について考える』日本放送出版協会 2002 年

これを読めば、相当な理解を得られるでしょう

絶対読んだほうが良いと思います

2、ハイデッガーのプロフィール

一応簡単にハイデッガーのプロフィールを載せる

本名:マルティン・ハイデッガー(1889-1976)

ドイツの哲学者。人間を世界内存在としてとらえる基礎的存在論としての**実存主義哲学**を創始。哲学は人間存在の解釈学から出発する現象学的存在論であるという立場から、人間存在の解釈学を通して**存在の意味**への問いを新たに設定した主著『存在と時間』(1927)は、実存主義その他に広範な影響を与えた。

辞書とか百科事典を元には書きましたが、わかりづらいね。これから解説をしよう

2、ハイデッガーの「存在論(現存在分析)」

試験内容に沿って、存在論のなかの出発点である「現存在分析」について詳しく述べる

初めに言うておくが、ハイデッガーの思想はあらゆるところが繋がっている

だから、前後を確認しながら、よく読んでほしい

1)「存在論」とは？

「存在論」とは「存在のありかた」ではなく、「存在そのもの」を取り扱ったものである

ハイデッガー曰く、「存在への問い」は古代ギリシアから忘れ去られており、つまり「存在忘却」がおこっていた。(アリストテレスは存在について考えていた)

西洋哲学なんて「存在忘却の歴史」である。世間の人々は存在について見向きもしない。

「存在の問いは陳腐」だとハイデッガーは言った。

しかし、「存在」というのは当たり前に受け止められている

たとえば、「火事が起こったぞ！」と言えば、「非難しろ！」「危ないぞ！」「助けてくれ！」といういろいろな意味がふくまれている(北川先生の本 P28 参照)

つまり、「火事がある」ということからさまざまな意味を得ているから、「存在」から意味を受け取っていることは確かなようだ

だけど、「存在とはなんだ？」と聞かれたら答えられない

ここでまとめてみると

1、「ある」とはもっとも一般的な概念である。

2、「ある」は定義できない

3、「ある」は自明な概念である。つまり「誰もがそれを分かっている」という平均的な理解可能性は理解不可能性を意味している。

この「ある」を探っていくのが「存在論」である。

そしてハイデッガーは「存在の問いは存在の意味についての問い」と述べた

つまり、存在の意味をわかることが目標である、ということだ

しかし、「存在論」は陳腐であるから、これの現状を打ち破らなければならない

そのことをハイデッガーは「破壊」または「破砕」と言った。

そして、破砕によって「存在についての原初的な定義が出てくるだろう」と述べた。

2)「存在論」の出発点としての「現存在分析」

ハイデッガーは、存在論を進めていくのに「現存在分析」を出発点とした。

現存在分析とは、「私たちが「自分が存在している」という端的な事実についてより深く考え、それを通して「存在すること」の意味について新しい洞察を獲得することです。」(北川先生の本 P9 参照)

では、「存在論は破砕が必要だ」と先ほど書いたが、「現存在分析」にも必要である。

ハイデッガーは、存在について破砕されていない人間を「世人 das Man」と言った
世人は「平均的で、疑問の余地がなく、うまく機能している」ものであり、「世間に埋没している」。
しかし、それは「実存」(個人が孤立して個別でしかあり得ないこと)が欠如している。
だから、自分自身の存在を見直すことによって、眠りから目覚めなければならない。
つまり、自分の存在の意味を見直すことである(存在の問い＝存在の意味の問い)
こうすることによって、自分の「存在についての原初的な定義が出てくるだろう」
ここでわかるが、どうやら「存在そのものの問い」と「人間のありかたの問い」は重なっているようだ

3)「世人」から「現存在」へ

2)で述べたように、まず人間は「世人」である

だが、存在について考えることによって世人から脱出できる

そうしてなるのが「現存在 Dasein」である

しかし、存在について考えても、もはや我々は存在について理解をしているようである(1)参照)

ここでハイデッガーが述べたのは「円環の道を行くこと」である。つまり、「結果」と「筋道」を行き来することだ。

今我々は存在について理解している(結果)

しかし、なぜそうなのかは知らない(筋道)

この二つを行き来することが重要であるとハイデッガーは述べた。これは「循環論法」と言われる。

4)「現存在」とは？

「現存在は、つねにみずからを実存からして、つまり自分自身であること、あるいは自分自身ではないことの可能性から理解している」とハイデッガーは述べている。

また、「現存在は、可能性のほうから自分を理解する」とも述べている。

まず、ハイデッガーの言う「理解」そして「可能性」とは何かがわかれば、これらの言葉がよくわかるだろう

ハイデッガーは「理解とは、投げかけである」という

つまり、「理解」の過程というのは、あらかじめ予測して、それが正しければ理解になり、間違っていれば理解していない

また、「予測」というのは「こうである可能性があるんじゃないかな」というものである

だから、「理解」とは「可能性から予測を投げかける」ということである

では、現存在を考えてみよう

現存在は、自分の存在の意味を考え、理解を得ようとする。その理解とは、「こうではないかな」という可能性を投げかけることによってである。

では「自分自身であること、あるいは自分自身ではないこと」とはどういうことだろうか？

存在の問題とは、究極的には「存在するかしないか」ということである。

だから、現存在はあらゆる疑問について「可能性」の段階にいて、そして存在するかしないか、まだわか

らないという宙ぶらりんな状況から理解する、ということである。

5) 現存在と世界

では、現存在と世界の関わりを確認しよう。

ハイデッガーは「現存在は、世界のうちにいる存在」と述べている。

つまり、自分と世界がスッパリ分かれているのではなく、「内にいる」のだ。

そして、「現存在は世界に対して気遣いを持つ」ということも述べている。

「気遣い」という言葉がわかりづらいが、「ある存在がその存在なりの姿を取るようにする、あるいは、その存在なりの姿を保つようにしてあげる」ということだ(北川先生の本 P79)

我々は、パソコンはパソコンとして見ており、机は机として見ている。

それもまさに「気遣い」であり、壊れたときは修理をしようと必死になるだろう。

つまり、まとめると、「気遣い」によって「自分にとって」引き寄せられた世界の中にいる、ということだ。

6) 「時間性」

最後に、時間性について述べよう。

あらかじめ言うておくが、「時間性」についてはあまり授業でやっておらず、非常に難解で、本でもあまり述べられていないため、それほど重視する必要はないだろう。

(ハイデッガーの「時間性」の考えは、途上で終わったと北川先生は述べている P96)

まず、ハイデッガーは「存在の意味とは時間のことである」と述べている。

我々はさまざまな時間性を抱えることで、さまざまな存在が可能になっている。

つまり、「時間」がさまざまな存在を可能にしている、ということである。もしも時間がなければ、存在という概念もありえないだろう。

この「時間性」こそが、存在にとって重要なのである。

3、「安全」と「歴史」について

2 で確認した存在論をもとに、「安全」と「歴史」について考えていこう。

僕が考えるに、「安全」は「気遣い」、「歴史」は「時間性」に主に関わっている。

だから、「時間性」についてあまりやってない我々は、「安全」について書いたほうが有利であろう。

ここでは一応「歴史」についても書くが、あまり良い内容になりそうにないが、悪しからず。

1) 「安全」について

まず、授業で北川先生が述べたことを確認しよう。

1、安全は、複数の系が関わっている(系とは、個人や共同体など、いろいろなレベルのことを指しており、それぞれ独立している)

- 2、安全は、意識されない
- 3、「安全」と「安心」
- 4、「安全」への志向が必要

ちなみに、僕が「安全な状態でなくても、安全を知ることにはできる。」と書いたところ、「これを出発点としてもう一度考えてみることに！」と返信が書かれていた。

つまり、「安全」は「気遣い」によって作られ、そして維持されるのだ、ということであろう。

そして、「安全」は我々と切り離されてあるのではなく、「我々は安全の中にいる」

だからこそ、普段意識されないが、現存在は、気遣いによって安全を意識するだろう。

つまり、危険な状況にいる人のほうが安全について考える傾向があるというのは、自己の存在が脅かされるからこそ、自己の存在が意識され、現存在として気遣いを持つ、ということだ。

また「安心」というのは、世人を表していると考えられる。現存在は、不安定な存在であるとハイデッガーは述べている。

ここでまとめてみると

我々は「安全」の中にいる→世人は意識しない→逆に、現存在は気遣いによって、「安全」に対して気遣いを持つ→だから「安全」ではない状況にいる不安定な人、つまり現存在のほうが「安全」に対して気遣いをもっている

ということになるであろう。

2)「歴史」について

「歴史」とは、人類の過去(記憶)についての基礎存在論である、と述べられている。

だから、「歴史概念(歴史とは何か?)」についての問題ではない

重要なのは「本来的に歴史的に存在するものを、その歴史性に向けて解釈すること」である

この意味を授業中に書かされたが、もう一度考えてみよう

「その歴史性」の「その」は、「本来的に歴史的に存在するもの」を指している。

だから、「本来的に歴史的に存在するもの」が持つ「歴史性に向けて」つまり「歴史性を中心にして」解釈する、ということである。

だから、「本来的に歴史的に存在するもの」が「歴史」においてどのような「性質」を持っているのか、ということを中心に解釈する、ということになるだろう。

ちなみに、僕はこれを書いたら二重丸をもらいました。だから、間違っていないと思います。

4、おまけ(あとがき)

今学期授業を受けてみて、そしてこのプリントを書いてみて思ったのは、やはりハイデッガーの思想を勉強するには短すぎだった。

ハイデッガーが一生かけて考えたことを1学期でわかるわけないし、このプリントに完全にまとめられるわけがない。

このプリントは、できるだけわかりやすく、短くまとめようとしたため、省略されている部分が多々あり、わかりづらいところもあるかもしれない。

そこは本を読むとか、自分で調べて、どうにか補ってほしい。

みんながいい点数を取ることを願っています！

This 'Shike-puri' is written by W·D·T from L3-16-2009.

And this is provided for EVERYONE who is eager to study!!